

夏休み特集	1
第16回五月レガッタ	5
科学研究費配分内定	8
各種委員会委員名簿	9

夏 休 み 特 集

「夏休み」考

磯田 光一

「夏休み」という課題をあたえられ、しばらく考えこんでいるうちに、やがて判ってきたことは、「夏休み」とはきわめて日本的なものだということであった。『オックスフォード英語辞典』は“summer vacation”や“summer holidays”を独立項目の語として認めていない。つまり「夏服」を「サマー・スーツ」というのと同じ意味で「夏休み」があるにすぎない。それもそのはずで、秋に新学期のはじまる欧米諸国では、夏休みとは一年のしめくくりと残務整理、それに新年度への準備期間であって、われわれの考える「夏休み」とはいささかニュアンスが異なっている。

日本に「夏休み」が導入されたのは、明治初年の「お傭い外国人」の契約書に、夏と冬とに有給休暇を認めたことに発端するらしく、要するに、労働立法と傭雇条件の改善されつつあったイギリスの真似をしないと、大学教授や技術者に外人を傭うことができなかったのである。その意味では、夏休みは暑い時には無理をさせないという考え方に立つもので、レジャーその他に使うのがいちばん本来の意味にふさわしいようだ。明治初年に日曜日を休日と定めた時でさえ、キリスト教の真似をして勤勉の美德をそこなうのは良くない、という議論が出たほどであっ

た。学校の夏休みは、官庁の夏季有給休暇を国公立の教育機関にも拡大して適用したわけで、「夏休みの宿題」というような考え方があっても、じつは寺子屋教育の勤勉精神が、明治初年の『西国立志編』の勤勉精神と結びついたものなのである。

この日本に固有の「夏休み」は、しかし、夏休みが勤勉精神とつながりながら、しかも微妙にそこから離反していくところに、真の意味があると私は思っている。旧制中学3年生で敗戦をむかえた私は、中学の上級から旧制高校にかけての夏休みは、古本で買った文学や思想の本をまとめて読むのに絶好の季節であった。ところが新制大学に入って教養課程で結核療養の経験をもった私は、療養中にはいわば「強いられる休暇」のなかにいたことになる。その後、学校にもどってからは、夏休みはアルバイトと結びついた。

やがて英文科の大学院に入り、さらに教師や文筆業を営むころには、クーラーが除々に普及してきたので、ふだんやりにくい仕事をまとめてやるのに夏を使う。去年は自分の著書の校正が夏になるようにスケジュールを組んだ。これも日本的な勤勉精神のあらわれであろう。仕事に不向きだから休むはずの「夏休み」を、勤勉の思想で色あげしてしまっで一世紀になるが、これが日本的な美德なのか、悪徳なのか、どうもよく判らない。

(工学部一般教育等 教授)

夏休み？

近藤 建一

私にとって“夏休み”という言葉はひどくノストラジックに響いてしまう。私の夏休みのイメージは海や山で遊びに興じて汗を流しているか、もしくは遊びに疲れて木影や風通しの良い縁側で昼寝をしているかのどちらかしかない。またそれら以外は相応しくないとと思う。それは恐らく、小学生時代の“よく学びよく遊べ”というあの標語の後半部分を良く

実践させてもらったお蔭かも知れない。当時は、夏休みに入るや否や四国の山の中の親戚の家へ出かけ、いとこ達に“遊び”を教えてもらったものだった。釣りも虫取りも、まず道具を作るところから始まる。小刀一つで何でもがおもちゃや道具に変わった。古いこうもり傘などは正に骨までしゃぶるようにして危険なピストルに変わっていった。最近、竹トンボがデパートで売られているのを見ると、何とも言えないイヤな気分がさせられてしまうのは私だけだろうか。私の“夏休み”は高校まで続いた。

東工大に入学するとヨット部に入り、夏休みのほ

とんどは合宿生活となった。夏合宿も最終日近くになると思考力は完全に失われ、セーリングマシンに変身する。この生活は極めて満足のいくものであったけれども、この頃から忙しい夏休み、暑い夏が定着し始めた。4年生になって研究室に所属してからは、秋の学会に向けて夏休みは猛烈に忙しくなった。研究のサイクルを少しずらせば良いものを、毎年夏休み前の申込みメ切日には見込みで出すものだから、もうどうにも止まらない。生来の怠け者を操るには最も効果的なテクニックであるが、最近では暑い夏に突入する前準備もままならなくなった。これを機会に、私の“夏休み”を取り返そうかとも考えている今日この頃である。

もう一つ思い出すのはアメリカの大学人の夏休み

何もしない夏休み

梶谷 洋司

私の学生時代には、夏休みは故郷（島根県）に帰省するためにあるようなものだった。今は懐しい急行出雲号、これが唯一の帰省方法であるかのように（事実最も速い手段であった）ただひたすらに西に向う。17時間のほとんどを立ちつくした時の記憶も鮮やかである。山陰のイメージそのままのどんよりと湿った薄雲の下、灼熱の睡ったような故郷の町の昼下り、憶い出をたどってさまよい歩き、あの年頃特有のじりじりする程の退屈さとあてもない焦りは何であったのか。所得倍増、列島改造で日本中皆気が逸り、私のような田舎者はつかれたように故郷を離れ、都会をいたずらに混雑させそれに倦み、しかし過疎の静寂にひたることもできず、快適な交通網など更にはない日本をただ右往左往していた時代であった。この無為の自覚は次のステップへの踏み台になり、あの殺風景な大岡山へ帰る日の待遠しさにつながった。今思えばそれなりに大切な日々であった。それぞれの夏休みはそれぞれの価値をもつ。若い学

「創造」への心の準備

中井 武

夏休みの過ごし方？ 小学校でもあるまいし、これ位は自分で計画・実行してほしいと思う。せっかくの機会なので、日頃学生諸君について感じることをかかせていただく。

近頃、学生諸君に接して気になることは、「今な

である。私が一年間客員研究員として滞在したカリフォルニア工科大学では、学生は実に良く勉強する。また、宿題が猛烈に彼らを迫立てる。それは寝る暇もない程で、日本の大学のテンポに慣らされた日本人留学生は悲鳴をあげていた。教授連の多くも早朝から深夜まで働き、コンピュータももちろん24時間働いている。さすがはノーベル賞20人の大学だわいと感じさせられる。ところが夏休みはもとより、学期の合い間などは学生も教授連もかなり長い休暇を取って、海に山に砂漠にと存分に楽しんでくる。“よく学びよく遊べ”が標語としてではなく、そこには各個の中に生きていた。そしてアメリカの底力を見る思いであった。

（工業材料研究所 助教授）

生諸君がアルバイトに、旅行にと目的ありげに夏休みを有効たらしめるべく設計しているのを見ると彼らは私のような夏の過ごし方をすることはもはや出来ないであろうと一種の感慨を覚える。

今や四十代になった私にとって夏休みはどのように変わったであろうか。公式には講義が途絶えている期間に過ぎない。しかし、夏休みがあつていいですねという世間の誤解の一言が薄給その他諸々の不満の慰めですらある我が聖職のこの大切な夏休み。しかるに昨今は学期中に処理できなかった雑用の為の期間として日常にとり込まれ、もはや様々な夢に身をまかせることへの期待に心を躍らせる存在ではなくなっている。日本中、あの三十年代とは異質の目的意識のもとに中年族は年々と忙しさを加え、出張、会合が夏休みを喰い散らしている。

旅行の計画が旅行そのものよりも楽しいように、今の私にとっては夏休みをどのように雑用予定で埋めないかの工夫が自虐的な楽しみになっている。

「役に立つ夏休みの過ごし方」は子供や学生諸君のためにとっておき、私は昔のように溺れる程の無為にひたりたい。せめて3週間というのは無理であろうか。

（工学部電気・電子工学科 助教授）

「ぜ東工大で学ぶのか」、「今なぜ学問(化学、物理…)をするのか」という自分なりの動機づけが少々希薄なことと、自分のなすべきことを「好きか嫌い」で決めてかかること。これは何も東工大生特有のことではなくて、最近の学生意識調査（東大新聞5月16日号、サンケイ新聞(夕刊)5月29日号)をみても、全国的な傾向のようである。

「フォーチュン」誌(5月14日号)で“国家的災厄”

とまで皮肉られた日本の大学生は、健康的で堅実な

ライフスタイルを身につけている反面、学問への情熱、強烈な個性、社会とのかかわり意識などに欠けるということは淋しい現実である。

毎日を知的刺激の乏しい「学習」(既知のことを学ぶ)にあけくれる諸君に、「強固なidentityを」というのは少々酷かもしれないが、この「学習」期間中に、自分の内から湧き上る「創造」(未知への挑戦)への欲求(Want)をつくりあげてほしいと思う。創造活動には情念の力がある。そのために、先人の「創造への情熱」を読みあさってほしい。たとえば、本学の森政弘先生の「発想工学のすすめ」(講談社)、広中平祐著「学問の発見」、福井謙一著「学問の創造」(ともに佼成出版社)、松山幸雄著「勉強のすすめ」(朝日新聞社)など。

「好きこそものの上手」は一面の真理をついていられるけれども、「嫌いこそものの上手」もまた真実であると思う。こんなにテニスが大好きな日本人から一流のプロ選手が生まれないのも悲しい事実である。

読書のすすめ — 事実か意見か —

小林 孝彰

長津田で日ごろ接する若い人にきいてみると、かなり多くの人が「英語の力は大学に入ってから向上するどころかむしろ低下している」という。日本的遠慮深さからそういうのかとも疑われるが、輪講やセミナーでの経験によれば案外本当に力が落ちているのかなと思う。むろんこれは会話能力とか発音についてではなく読解力についての話である。

強いて勉めるのが勉強だと昔きかされたが、英語も異国語である以上、自然に楽しんでいたのでは身につくはずはない。大学に入るまでは受験科目にあるからというやむをえない理由で勉強したものの、入学してしまえば強いて英語を学ぶ理由はないのだろうか。

木下是雄著、理科系の作文技術(中公新書、1981)という本の7章に米国の小学校用の教科書の中に次のような設問がされていると紹介されている。「ジョージ・ワシントンは米国の最も偉大な大統領であった。ジョージ・ワシントンは米国の初代の大統領であった。これら二つの文のどちらが事実の記述か? もう一つの文に述べてあるのはどんな意見か? 意見と事実はどうちがうか?」著者はこれを見て衝撃を受けた、と書いているが、引き続いて紹介してある例を読み進むうちに私もまたウーンとうなつてし

好き嫌いを超越した「やりたい・やらなければならない」という情念から新しい創造が生まれるのではないのでしょうか。ノーベル賞を受けられた福井先生が大学に進学されるとき、喜多源逸教授(応用化学)から、「数学が好きなら化学をやれ」といわれたそうです。自分を創るということは、いつも自分に問いかけ続けることだと思う。これはジョークけれども、“食堂にいった時は定食をたべない” “アイスクリームやコーヒーをたのむ時は、その時ほしい種類を指定する” つまらないことだけれども、一つ一つを自分に問うトレーニングが必要と思う。一度やってみて下さい。

少々説教じみた、つまらない話になってしまいましたが、夏休み中、スポーツをしながら、旅行をしながら、「将来、自分は何をもって自己表現しようとするのか」自分の将来像をあこれ描いてみて下さい。では楽しい夏休みを!

(工学部化学工学科 助教授)

まった。

事実と意見を混同すべきでないといわれれば誰しもそうだと一応はうなずくだろうが、問題はどのような訓練をすれば両者を識別して論理に乱れないようにできるかである。著者が指摘するように日本の学校ではどの段階でもキチンと取り上げられてはいないとすると、気づいたときから個人的に努力するしかない。この本を読んで思いあたることのある人は、訳本のない引用文献のどれか一つを読んでみてはどうだろう。具体的な知識を得るために本を読んだり講義をきいたりしても、その素材をどういう具合に用いて筋道の通った話にするかはまた性質のちがう勉強が必要になる。研究成果の発表や技術報告書の作成の段階になって、何をいいたいのかわからない、とか、英語が不備である、と原稿を突き返されないですむなら、まわり道のようにも結局は近道になるのではないだろうか。英語国民の発想の基を知るといえはいかめしいが、彼の国の子供は、学生は、どんな訓練をくり返し受けているかを知ることとは無駄ではないと思う。

(大学院総合理工学研究科 助教授)



ヨット入門の勧め

下河辺 明

大学生にいまさら夏休みの過ごし方を説くのも気がひける。4年生、大学院生ともなれば、夏休みなどないのではとも思われる。私自身の学生時代といえ、ヨット部の複合宿が全てで、とても他人に自慢できるようなものではない。しかし、夏、海、ヨットという発想で何か書けというのがクロニクル編集者の考えらしい。

昔から、ヨットの世界は競技派と波枕派に別れている。競技派に入りたければ、本学ヨット部が一番の近道である。江ノ島、葉山あたりのセーリングクラブでも良い。最近ではウインドサーフィンやカートのアップ可能な小形ヨットも多い。クラブに所属せずに個人的に練習することもできる。ただし、信頼できるベテランの指導と事故の際の救助体制の確認は必要不可欠である。大形の外洋ヨットによる競技も最近では盛んである。これらは慢性的なクルー（乗組員）不足に悩んでおり、未経験者でも歓迎される。

合宿について

北原 和夫

夏休みは自由に身動きのとれる時期であるから、日常の場からとび出して日頃ゆっくりとは会えない人々に会いに行くよい機会である。夏休みは南半球を除けば世界共通であるから、国際会議は大体夏休みに集中している。今年の夏休みは東京で国際会議が一つあり、他に国内の二つの泊り込みの研究集会に参加しようと思っている。その他にも研究室の合宿や、学生時代の研究室の合宿勉強会などがあり、この夏も結構忙しくなりそうである。

最近では国際会議の形も、研究成果の発表の場という従来の形よりもワークショップという形の研究集会が盛んに行われるようになった。文字通り「仕事場」で、参加者が一緒に研究する、という形である。短くて一週間、長い場合は一カ月も起食を共にして研究を行うのである。大体午前中にセミナーを行い午後は水泳をしたりして遊ぶ。夜にまた勉強という次第である。

学問の成果は客観的なものであり、普遍性や合理性を有するものであるが、それを生み出す人間の思考の過程は多分に主観的要素をもつものである。抽象化された概念ももとをただせば日常生活で体験す

ももっとも、大形艇のクルーは時間的にも体力的にも相当きついから、覚悟してかからぬと長続きしない。

波枕派はブルーウォーター派とも呼ばれる。波、潮、風の自然を相手に、“行方定めぬ波枕”を理想の境地とする。現実には、艇は大小様々、釣り専門から世界周航を狙うものまで、雑多な考えが許される。毎年、来年は南太平洋に行くと宣言し、いっこうに出航しない船もある。こちらの派もクルー不足は深刻で、希望者はいつでも仲間に入ることができる。

日本は海洋国と言われるが、国民の大多数は海や船について無知である。最近の東大生の山中湖での事故もそれを証明している。遭難した学生の父親が“ボートは危険ということは十分知っていたはずなのに”と嘆いた。しかし、本来ボートは危険な乗物ではない。どのようにすれば危険なのかを知らなかったのだと思う。

夏休みに、一人でも多くの諸君に海や船に親しむ機会を持ってほしい。そのために必要なお手伝いならばできるだけことはしたいと思っている。

Bon Voyage!! （精密工学研究所 助教授）

る具体的事物からの連想によってできたものである。従って個人個人が心の中に描くイメージは意外にまちまちなものである。また同じ現象を目の前にしても、例えば物理屋と化学屋とは目のつけどころがちがうということはよくある。そんな訳で、最近、しばしば感じることは、「共に居る」という実に平凡なことが意外に学問の発展のために重要な役割を果たすのではないかと、ということである。学問の客観性論理性ということからみる限り文字に現わされたもので情報交換は十分行われ得るはずのものであるが、実際には当の本人のところに出かけていって一緒にしばらく議論してはじめて本当のところがよく解ったということがよくあるのである。

恐らく、学問に限らず、人間の精神活動のすべてにおいて、「共に居る」ということが、人間同志の相互理解にとって重要なことなのであろう。「同じ釜のメシを食う」ということの意味を良く知っていたのが古代ギリシア人で「シンポジウム(会食)」という言葉の後世に残してくれた。現代では食事抜きでシンポジウムが罷り通っているが、本来の姿にもどせば相互理解という意味での成果はもっとあがるであろうと思うのである。

この夏も大いに合宿のあつまりを楽しもうと思っている。
(理学部応用物理学学科 助教授)

第16回 五月レガッタ



新学期が始まり、すっかり春らしくなった中、4月29日に第16回五月レガッタが開催されました。その名のようにこのレガッタは、毎年5月26日の創立記念日に行われる慣例になっていますが、今年は当日が土曜に当たるため戸田ボートコースの申込みが多く、抽選の結果同日はこのコースを他の社内レガッタで使用する事となり、1か月近く早い4月29日の開催となりました。このため、学内レガッタの宣伝、準備不足と連休中という事が重なって参加クルーが少ないのではないかと懸念がありました。しかし、実際ふたをあけて見ると昨年を上回る20クルー、80名が参加、教務関係者、ボート部員を合わせると総勢120名が、普段は各大学の端艇部の練習で賑わうコースを借り切り、ボートレースに爽やかな汗を流すこととなりました。午前8時を回ると続々と練習希望のクルーが参集し、開会式前から熱い戦いが始まりました。それぞれ、我こそ優勝し栄光の祝杯をあげんものと練習に余念がありません。ボート部員に合わせて漕ぐことが大切であると言われるのですが、どうしても各自が力いっぱい漕いでしまい結果的に艇が速く進まない事を知ると、あちこちで「とにかく俺に合わせろ。」の声です。

練習も一通り終わり、午前10時30分には参加者全員が整列し開会式が行われました。教務部長の吉見先生による会長挨拶があり、続いて各クルーの視線が集まる中で前年度優勝者より優勝杯が会長に返還され、その沈黙を破って情報科学科4年の高館君が、「ビールをかけて賭けて戦います。」とユーモラスな宣誓をし、会場の笑いを誘っていました。

さて、予選は4杯レースで、1、2位が準決勝へ3、4位が敗者復活戦です。距離は400mで気力の勝負となりました。そのせいか、好タイムが続出し予選を終了した時点で、2分1桁を出したのが3クルー、さらに順風に助けられたとは言え1分38秒という驚異のタイムが「辻井研」によって出されました。敗者復活にまわったクルー中からも2分10秒台のクルーが出るなど、まさに実力、気力伯仲です。敗復終了後、ボリュームたっぷりの特製カレーライ

スで腹ごしらえをし、午後の準決勝戦に闘志をみなぎらせていました。

準決勝4杯レースを1位で通過したクルーは決勝へ、2位は順位決定戦へと最後のレースに臨みました。ここまで勝ち残ると何がしかの賞品を手にすることができるのですが、1つ順位が違うとビール券の枚数が幾何級数的に違ってくるであってスタート地点へ向かう各クルーは最後まで懸命に練習です。順位決定戦では、準決勝で女子が乗っているクルーに100m近くハンデを与えたために、2位となり順位決定戦へ出場した「グラフブラザーズ」が、実力を発揮し見事1位となりました。

決勝戦は、新鋭の「辻井研」、「うんこず」、例年上位に進出している無機材料の宇田川研の精鋭「ガオタ」、「メンマ」、そして「おしゃまんべ建吉さん」の以上5クルーによって争われました。ゴール前ではどこが優勝杯を手にするか予想が飛び交う中、発艇を待ちます。スタート！ 5レーン「ガオタ」、3レーン「うんこず」、2レーン「辻井研」がスタートで出ました。200m付近から5レーンが序々に他艇を引き離し始めました。3レーンも必死に力強いストロークで追撃しますが、5レーンの整然と4人のブレードが合った「ガオタ」は、そのままゴールにはいり見事優勝しました。決勝戦にふさわしく大きな声援が飛びかう白熱したレースでありました。

閉会式では教務部長より優勝杯・賞状、ビール券が授与され、さわやかな笑顔が広がりました。

途中我々の不慣れのため試合が遅れた事もありましたが、参加者全員の協力で盛会に無事終了した事を感謝します。女子が参加した場合のレース方法などに幾つかの問題点がありますが、今後さらに五月レガッタが教職員、院生、学生、留学生の交流の場としてさらに発展し全学あげての水上運動会になるよう希望し、努力したいと思います。

第16回 五月レガッタの結果

- | | | | |
|----|--------------|----------|-------|
| 優勝 | 「ガオタ」 | ベストタイム賞 | 「辻井研」 |
| 2位 | 「うんこず」 | ワーストタイム賞 | 「メンマ」 |
| 3位 | 「辻井研」 | | |
| 4位 | 「おしゃまんべ建吉さん」 | | |
| 5位 | 「メンマ」 | | |
| 6位 | 「グラフブラザーズ」 | | |
| 7位 | 「のんべえノンノン」 | | |
| 8位 | 「しこつこ」 | | |

五月レガッタ実行委員長

東工大端艇部主務 三村邦年

山と海の研修施設紹介

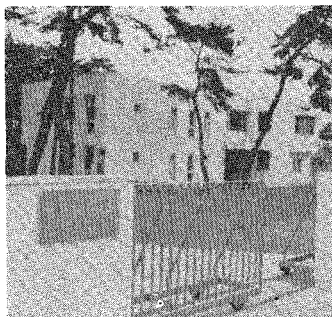
本学には、学生及び教職員のための合宿研修施設が山と海にあって、各施設には、管理人が常駐して施設の管理に当たっていますので、四季を通じて、研修、合宿に広く利用できます。

大洗合宿研修所 定員58名

茨城県東茨城郡大洗町大貫角一

上野 国鉄(常磐線) 特急80分 水戸 茨城交通バス(オグノキカクイチ) 約30分 大貫角一

大洗合宿研修所は、水戸からバスで約30分の大洗町にあって、大貫海岸を背にした松林の中にある。宿泊棟は宿泊室の外に中研修室と集会室を設け別棟の食堂兼大研修室と合わせて、収容数の増加をはかり利用度を高めています。また、施設内には体力づくりの一助としてテニスコート・バレーコート及びアスレチックエリアが設置されています。近くには、動力炉・核燃料開発事業団、海に関する模型を展示した海洋博物館、海水浴場、涸沼川の釣り場等があって、合宿、研修等に広く利用できます。

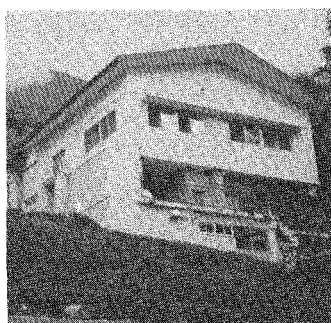


木崎湖合宿研修所 定員40名

長野県大町市大字平南平

新宿 国鉄(中央線) 特急3時間50分 松本 国鉄(大糸線) 普通1時間20分 海ノ口 徒歩 約10分

木崎湖合宿研修所は、鹿島槍、五竜岳等を背景に、木崎湖を眼下に見おろす斜面にあり、研修、合宿、登山、スキーなどに四季を通じて利用されています。建物は、鉄筋コンクリート2階建てで宿泊室、食堂兼研修室、浴室、乾燥室等の設備も完備しています。

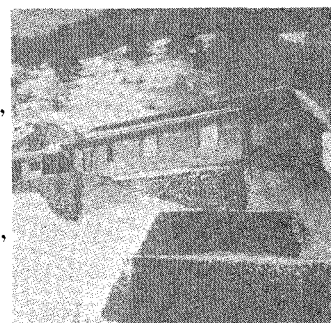


鹿沢合宿研修所 定員25名

群馬県吾妻郡嬬恋村鹿沢

上野 国鉄(上越・吾妻線) 急行3時間 万座鹿沢口 国鉄(バス) 約45分 鹿沢温泉 徒歩 約10分

鹿沢合宿研修所は、2,000m級の山々に囲まれた湯ノ丸牧場を背に、眼下に溪流を望む斜面にあって、木造平家の建物に宿泊室、乾燥室、自炊設備等があり、登山、ハイキング、スキー等の基地として恵まれた環境にあります。なお、現在浴室の設備はありません。



★利用手続

1. 各施設を利用する時は、まず始めに利用希望期間と人員について宿泊可能かどうかを厚生課寮務掛(内線2062)に問い合わせ、宿泊可能ならば、申込書に必要な事項を記入して同掛へ提出のうえ、使用許可書の交付を受けて下さい。現地に直接申し込むことはできません。
2. 申し込みは、原則として利用日の2ヶ月前から利用日の一週間前までの間に受付けます。
3. 各施設の費用は、1人1泊、500円の運営費と、食事を希望する場合は、食事代として、朝食300円、夕食800円が必要です。但し、鹿沢は自炊となりますが炊事用具と食器類は完備しています。運営費は申し込みと同時に徴収しますが、食事代は現地で徴収します。
4. 大洗のテニスコート・バレーコートの使用は申込制になっています。
5. その他詳しいことは、寮務掛に問い合わせして下さい。

★利用上の注意

各施設は先述した通り、学生と教職員のための研修及び共同生活を通じての人格陶冶を図るための施設ですから、学外者及び教職員の家族だけの利用はできません。利用者は、これ等の趣旨を十分理解して、他人に迷惑をかけたり、旅館と間違えたような言動は厳につつしみ、管理人の指示に従って下さい。

松 風 研 修 施 設

横浜市緑区松風台 21—13
田園都市線青葉台駅下車徒歩10分

松風研修施設は、松風学舎の建物に併設してあります。この施設は、本学のセミナー及び教職員のための研修だけに使用が認められています。収容人員は40名で宿泊はできませんが、食事の提供はできません。使用期間は月～土曜日（土曜日は午前中、祝祭日は除く）です。

なお、学生が利用する場合は必ず指導教官の出席が必要です。その他、詳しいことは寮務掛に問い合わせして下さい。

昭和59年度

放射線障害防止に関する講習会

放射線障害予防委員会委員長 新井 栄一

今年度の標記講習会は、6月6日(水)14時30分より第121講義室で行われた。放射性同位元素、粒子加速器、X線発生装置を使用する全学の学生及び教職員が、171人参加し、講演題目及び講師は下記のとおりであった。

(1)開会あいさつ

新井栄一

(2)本学の放射線の利用及び管理について

理学部 篠野嘉彦

(3)放射線及び放射性物質の安全取扱いについて

東京大学アイソトープ総合センター 森川尚威
まず、私から「一般に他人の事は見えても自分の事はよく見えないものである」ので、今日は「他人」である森川先生の話を押聴させていただき今後の参考にしようあいさつを行った。さらに、本学では過去10年「放射線の管理」という面では滞りなく事を進めて来た。たしかに、RI実験室については53年度に大岡山に58年度には長津田に新設が認められて来たものの、加速器等大型研究設備の充実という点ではまだまだ十分とは言えない。本学の加速器分野の研究者は大半高エネルギー研究所等他機関の研究設備を利用して研究業績を上げている。しかし、このままでは研究業績は残っても「物」として本学に残るのは「紙」ばかりで「財産」にはならない、という現状を顧みての感想を述べた。篠野先生からは次のような話があった。放射線の利用と管理は両立させなければならない。このためには「人」と「物」

の部局間の流れをはっきりさせ、又、記録に残さなければならない。本学のRI、加速器の利用件数、利用者数は年々増加している。これに伴ない、発生する様々な問題、例えば表面汚染測定、空間線量率測定などによる汚染の現状把握、除染、原因調査、教育訓練について、過去数年の経験から説明があった。

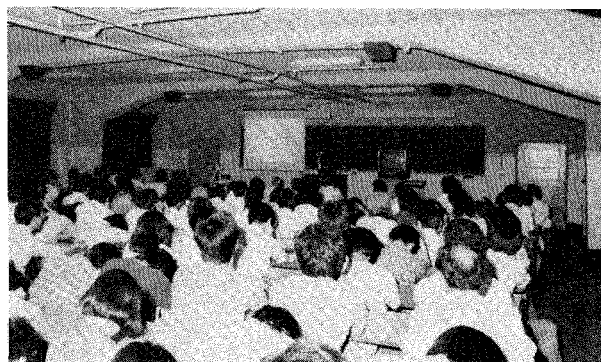
東大の森川先生からは次のような話があった。講習会参加者が各人の放射線取扱について見直しの機会を持たれることを願い、2つの実験例とビデオテープ等を用いて話を進めた。

1. 放射性同位元素（RI）の使用施設の表面汚染には、スポット的ないわゆる汚染のほかに、汚染物質の量と放射能が比例関係を示す広範囲にわたる汚染が認められることがある。これはRI及びその廃棄物などの取扱方法、施設の給排気設備の運転状況及び作業環境の管理に関連する室内全般の汚染と考えられる場合は、実験条件を整備することによって、ほとんどバックグラウンドの状態に保持できるであろう。

2. 比放射能の高い、キュリーオーダーのトリチウム水の生物影響研究の実験システムを作る際の基本的な考え方の展開、安全取扱装置の開発と性能、安全取扱器具の活用と効果及びトリチウム水安全取扱法の事例などについて、データと対比しながら要点を紹介した。

3. 医療施設における安全取扱についてのビデオテープ（日本アイソトープ協会企画）を映写し、現状を紹介した。

最後に密封線源、X線装置、加速器等の安全取扱についての問題点を摘出するとともに、自由が尊重される学問のための研究手段であっても、科学技術の利用は社会の約束事を逸脱してはならないこと、管理区域の社会的意義を十分考慮しなければならないこと、研究教育機関における放射線取扱者は、放射線安全管理の実務の一部を担当しなければならないことを強調した。（原子炉工学研究所 教授）



科学 研 究 費 配 分 内 定

昭和59年度文部省科学研究費補助金年度当初の配分内定通知が5月下旬に文部省からありました。本学関係分は、新規・継続を合わせて採択件数315,配分予定額965,900千円でした。昨年度当初分との比較対照は次のとおりです。なお、奨励研究Bも配分が予定されていますが、ここには含まれていません。

新 規 分

区 分	昭 和 58 年 度					昭 和 59 年 度				
	件	申請額(千円)	件	配分予定額 (千円)	採択率 (%)	件	申請額(千円)	件	配分予定額 (千円)	採択率 (%)
が ん 特 別 研 究 (1)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
が ん 特 別 研 究 (2)	1	3,500	0	0	0	—	—	—	—	—
自 然 災 害 特 別 研 究 (1)	—	—	—	—	—	2	19,686	1	4,500	50
自 然 災 害 特 別 研 究 (2)	3	15,492	1	2,600	33.3	4	12,173	1	3,800	25
環 境 科 学 特 別 研 究 (1)	2	4,718	0	0	0	1	1,955	1	1,700	100
環 境 科 学 特 別 研 究 (2)	3	8,766	0	0	0	2	4,701	0	0	0
エ ネ ル ギ ー 特 別(エ ネ 1)	6	86,960	5	57,800	83.3	2	26,911	2	19,400	100
エ ネ ル ギ ー 特 別(エ ネ 2)	19	67,283	9	22,600	47.4	25	85,858	11	29,000	44
エ ネ ル ギ ー 特 別(核融合 1)	5	97,902	4	44,500	80	5	56,820	5	36,800	100
エ ネ ル ギ ー 特 別(核融合 2)	5	34,147	2	8,500	40	5	24,977	1	4,800	20
特 定 研 究 (1)	7	141,458	6	108,500	85.7	7	136,364	5	97,900	71.4
特 定 研 究 (2)	36	123,026	14	33,800	38.9	22	75,084	5	8,700	22.7
総 合 研 究 A	25	215,630	7	39,800	28	27	269,173	9	59,500	33.3
総 合 研 究 B	10	30,360	4	6,900	40	12	37,838	1	2,000	8.3
一 般 研 究 A	30	703,635	5	77,800	16.7	27	655,765	7	129,200	25.9
一 般 研 究 B	111	755,714	22	109,600	19.8	130	900,079	33	172,300	25.3
一 般 研 究 C	210	502,116	55	84,440	26.2	216	523,749	65	98,600	30.1
奨 励 研 究 A	169	185,159	77	70,380	45.6	204	228,198	77	70,100	37.7
試 験 研 究 (1)	17	152,536	3	17,300	17.6	28	283,500	5	56,900	17.6
試 験 研 究 (2)	112	586,486	18	87,900	16.1	85	484,977	13	70,100	15.3
小 計	771	3,714,888	232	772,420	30.1	804	3,827,808	242	865,300	30.1

継 続 分

自 然 災 害 特 別 研 究 (1)	1	4,300	1	4,300	—	—	—	—	—	—
総 合 研 究 A	6	22,600	6	22,600	7	23,900	7	23,900	—	—
一 般 研 究 A	12	34,930	12	33,200	6	19,800	6	19,800	—	—
一 般 研 究 B	32	48,153	32	45,503	29	25,300	29	25,300	—	—
一 般 研 究 C	11	6,300	11	6,300	10	5,100	10	5,100	—	—
試 験 研 究 (1)	—	—	—	—	3	4,100	3	4,100	—	—
試 験 研 究 (2)	7	11,200	7	11,200	18	22,400	18	22,400	—	—
小 計	69	127,483	69	123,103	73	100,600	73	100,600	—	—
合 計	840	3,842,371	301	895,523	35.8	877	3,928,408	315	965,900	35.9

各種委員会委員名簿 (昭和59年6月現在)

学内規則に基づく各種委員会委員名簿を掲載します。(掲載順不同)

(◎委員長 ○副委員長)

評議会

学	長	松田 武彦
理 学 部	長	早川宗八郎
理 学 部		小口 武彦
		本間 龍雄
工 学 部	長	清水 二郎
工 学 部		榎本 肇
		石原 舜介
大学院総合理工学研究科長		田中 良平
大学院総合理工学研究科		岸 源也
		市川 惇信
資源化学研究所長		伊香輪恒男
精密工学研究所長		吉本 勇
工業材料研究所長		浜野 健也
原子炉工学研究所長		福富 博
附属図書館長		市川 惇信
教 務 部	長	吉見 吉昭
事 務 局	長	鈴木 博司

部局長会議

学	長	松田 武彦
理 学 部	長	早川宗八郎
工 学 部	長	清水 二郎
大学院総合理工学研究科長		田中 良平
資源化学研究所長		伊香輪恒男
精密工学研究所長		吉本 勇
工業材料研究所長		浜野 健也
原子炉工学研究所長		福富 博
附属図書館長		市川 惇信
総合情報処理センター長		池辺 潤
教 務 部	長	吉見 吉昭
事 務 局	長	鈴木 博司

教育委員会

理 学 部	藤原 大輔
◎小林 宏	
堀 素夫	
工 学 部	○坂本 宗仙
小泉 堯	
志村 正道	
早川 一也	
山本 經二	
徳永 宗雄	
加藤 雅治	
山本 明夫	
中野 和夫	
齋藤 安俊	
井関 孝善	
共通科目	森 雄次
繁樹 算男	
服部 隆一	
小野 昱郎	
加藤 誠軌	
木村 孟	
吉見 吉昭	
幹 事	教務部次長
	教務課長
	理学部事務長
	工学部事務長
	総理工等事務部長
	同 教務課長

施設委員会

理 学 部	○池川 信夫
	木村 泉
	川久保達之
工 学 部	山根 正之
	中条利一郎
	◎越後 亮三
	片岡 昭雄
	熊田 禎宣
	道家 達将
大学院総合理工学研究科	池田 光男
資源化学研究所	諸岡 良彦
精密工学研究所	林 輝
工業材料研究所	小池 迪夫
原子炉工学研究所	井上 晃
共通科目	飯尾 勝矩
大学院理工学研究科教官会議	堀 素夫
教 務 部	長 吉見 吉昭
事 務 局	長 鈴木 博司
幹 事	経理部長
	施設部長
	理学部事務長
	工学部事務長
	総理工等事務部長
	原子炉事務長

大学院委員会

理 工 学 研 究 科	菅野 恒雄
	大沼 甫
	松尾 禎士
	菊地 実
	辻 二郎
	古田 勝久
	山口昌一郎
	熊田 禎宣
◎新井 栄一	
総合理工学研究科	岸 源也
	大瀧 仁志
	佐藤 拓宋
◎古川 静二郎	
	丹生慶四郎
人 社 群	江頭 淳夫
外 国 語 群	中山 真彦
教 務 部	長 吉見 吉昭
幹 事	教務部次長
	教務課長
	総理工等事務部長
	同 教務課長

発明委員会

理 学 部	長 ○早川宗八郎
工業材料研究所長	◎浜野 健也
理 学 部	池川 信夫
工 学 部	飯島 俊郎
	高橋 清
	塩田 進
大学院総合理工学研究科	大西 孝治
資源化学研究所	大槻 茂雄
精密工学研究所	中村 哲朗
工業材料研究所	井関 孝善
原子炉工学研究所	鈴木 博司
事 務 局	長
幹 事	経理部長
	研究協力部長

研究委員会

理 学 部	浜野 勝美 小尾 欣一 小林孝次郎
工 学 部	谷口 雅男 後藤 尚久 ○長滝 重義 今野 浩 神尾 彰彦 白樫 高洋 佐藤 彰一 岸田 英明 大西 孝治 大浦 宣徳 精密工学研究所 工業材料研究所 原子炉工学研究所 幹 事
大学院総合理工学研究科	◎宗宮 重行 三神 尚 研究協力部長

広報委員会

理 学 部	岡 睦雄 宮崎 栄三 本蔵 義守 奥居 徳昌 新山 浩雄 長谷川健介 石井 彰三 深海 隆恒 佐伯 泰樹 横山 正明 明島 高司 橋本 弘信 山瀬 利博 神馬 敬 吉村 昌弘 関本 博 ◎関根 太郎 吉見 吉昭 鈴木 博司
工 学 部	大学院総合理工学研究科 資源化学研究所 精密工学研究所 工業材料研究所 原子炉工学研究所 大学院総合理工学研究科 教 務 部 長 事 務 局 長 幹 事
大学院総合理工学研究科	研究協力部長

留学生委員会

理 学 部	高橋 渉 川久保達之 宮坂 啓象 塚田 忠夫 川崎順二郎 大沢 吉博 大塚 二郎 上羽 貞行 菅野 恒雄 ◎柳沢 健 ◎渡辺 隆 川嶋 至 沼澤 治治 吉見 吉昭
工 学 部	大学院総合理工学研究科 精密工学研究所 理 学 部 工 学 部 ◎柳沢 健 ◎渡辺 隆 川嶋 至 沼澤 治治 吉見 吉昭
大学院総合理工学研究科	教務部次長 教務課長 厚生課長

厚生補導委員会

理 学 部	野口潤次郎 宝来 正子 井上 隆 梶内 俊夫 広瀬 茂男 田中 穂積 森地 茂 ○穉山 貞登 ◎関根 太郎 一國 雅己 吉沢 善男 松山 正男 辻 二郎 千葉 廉 阿部 光雄 藤江 学 鈴木 朝夫 吉見 吉昭
工 学 部	大学院総合理工学研究科 共 通 科 目 類 連 絡 会 議 部 理 学 部 工 学 部 精密工学研究所 教 務 部 長 幹 事
大学院総合理工学研究科	教務部次長 教務課長 厚生課長 理学部事務長 工学部事務長 総理工等事務部長 同 教務課長

一般教育等委員会

共 通 科 目	永田 一清 阿部 光雄 茶谷 正洋 山崎 正勝 玉泉八州男 桐生 武夫 小林 宏 武谷 汎 春山 志郎 石川 延男 慶谷 淑夫 中瀬 明男 関根 松夫 星野 芳夫 丹野 修吉 吉田 夏彦 吉見 吉昭
理 学 部	大学院総合理工学研究科 工業材料研究所 埋学部・工学部共通科目 兼任委員長 同 副委員長 教 務 部 長 幹 事
工 学 部	大学院総合理工学研究科 工業材料研究所 埋学部・工学部共通科目 兼任委員長 同 副委員長 教 務 部 長 幹 事
大学院総合理工学研究科	教務部次長 教務課長 理学部事務長 工学部事務長

附属図書館委員会

附 属 図 書 館 長	◎市川 悌信 前田 史朗 坂井 典佑 梅垣 寿春 夫戸 和夫 山根 正之 岡畑 忠雄 南 一男 渡辺 貴介 宮内 敏雄 前原 昭二 乾 正雄 野中 勉 小林 孝彰 吉田 弘 大友 進 森川 豊 上田 光宏 沢岡 昭 北本 朝史
附 属 図 書 館 長 津 田 分 館 長	附属図書館事務部長 同 整理課長 同 閲覧課長
理 学 部	大学院総合理工学研究科 共 通 科 目 資源化学研究所 精密工学研究所 工業材料研究所 原子炉工学研究所 幹 事
工 学 部	大学院総合理工学研究科 共 通 科 目 資源化学研究所 精密工学研究所 工業材料研究所 原子炉工学研究所 幹 事
大学院総合理工学研究科	教務部次長 教務課長 理学部事務長 工学部事務長

創立百年記念事業実施委員会

学	長	◎松田 武彦
理 学 部	長	早川宗八郎
工 学 部	長	清水 二郎
大学院総合理工学研究科	長	田中 良平
資源化学研究所	長	伊香輪恒男
精密工学研究所	長	吉本 勇
工業材料研究所	長	浜野 健也
原子炉工学研究所	長	福富 博
附属図書館	長	市川 惇信
総合情報処理センター	長	池辺 潤
教 務 部	長	吉見 吉昭
理 学 部		小口 武彦
		田中 郁三
		栗野 満
		梅垣 寿春
		本間 龍雄
工 学 部		中原 一郎
		竹中 俊夫
		榎本 肇
		飯島 泰蔵
		石原 舜介
大学院総合理工学研究科		岸 源也
		小林 啓美
		明畠 高司
精密工学研究所		森 栄司
工業材料研究所		黒正 清治
事 務 局	長	鈴木 博司
幹 事		庶務部長
		経理部長
		施設部長
		研究協力部長
		教務部次長

健康安全管理委員会

理 学 部	長	早川宗八郎
工 学 部	長	清水 二郎
大学院総合理工学研究科	長	田中 良平
資源化学研究所	長	伊香輪恒男
精密工学研究所	長	吉本 勇
工業材料研究所	長	浜野 健也
原子炉工学研究所	長	◎福富 博
附属図書館	長	市川 惇信
総合情報処理センター	長	池辺 潤
工学部附属工業高等学校	長	平井 聖
事 務 局	長	鈴木 博司
保健管理センター	所長	稲田 祐二
安全管理専門委員会	委員長	未 定
エックス線障害防止専門委員会	委員長	未 定
幹 事		庶務部長
		経理部長
		施設部長
		研究協力部長
		総理工等事務部長

教育工学開発センター運営委員会

セ ン タ ー	長	◎森 政弘
セ ン タ ー	教授	高野 緩
セ ン タ ー	助教授	清水 康敬
理 学 部	長	早川宗八郎
工 学 部	長	清水 二郎
大学院総合理工学研究科	長	田中 良平
附属図書館	長	市川 惇信
工学部附属工業高等学校	長	平井 聖
科学教育研究室	主事	坂元 昂
教 務 部	長	吉見 吉昭
事 務 局	長	鈴木 博司
教 育 委 員 会		小泉 堯
研 究 委 員 会		後藤 尚久
大 学 院 委 員 会		松尾 慎士
教 職 学 科	目	坂元 昂
共 通 科 目		玉泉八州男
理 学 部		永田 清
工 学 部		森田矢次郎
		平井 聖
		森川 陽
大学院総合理工学研究科		岸 源也
		武者 利光
		関根 太郎
幹 事		工学部事務長

長津田地区整備計画委員会

大学院総合理工学研究科	長	◎田中 良平
資源化学研究所	長	◎伊香輪恒男
精密工学研究所	長	吉本 勇
工業材料研究所	長	浜野 健也
天然物化学研究施設	長	吉村 寿次
像情報工学研究施設	長	辻内 順平
理 学 部	評議員	本間 龍雄
工 学 部	評議員	石原 舜介
大学院総合理工学研究科	評議員	市川 惇信
大学院総合理工学研究科		岸 源也
		大瀧 仁志
		林 国一
		武者 利光
		古川 静二郎
		丹生慶四郎
資源化学研究所		山本 明夫
精密工学研究所		森 栄司
工業材料研究所		黒正 清治
天然物化学研究施設		大島 泰郎
像情報工学研究施設		安居院 猛
附属図書館	長	市川 惇信
総合情報処理センター	長	池辺 潤
研究・情報交流センター	長	小林 啓美
総合研究館	長	小林 啓美
教 務 部	長	吉見 吉昭
事 務 局	長	鈴木 博司
幹 事		庶務部長
		経理部長
		施設部長
		附属図書館事務部長
		総理工等事務部長
		同 庶務課長
		同 経理課長
		同 教務課長
		理学部事務長
		工学部事務長
		総合情報処理センター事務長

組替えDNA実験安全委員会

組替えDNA実験安全主任者	◎野宗 嘉明
理 学 部	正田 誠
工 学 部	平本 幸男
大学院総合理工学研究科	戸田不二緒
原子炉工学研究所	明畠 高司
研究委員会	岡本 眞実
保健管理センター	大西 孝治
事 務 局	榎本 稔
大学院総合理工学研究科	鈴木 博司
工 学 部	加藤 武
	道家 達将
幹 事	庶務部長
	施設部長
	研究協力部長

国際学術交流委員会

理 学 部 長	早川宗八郎
工 学 部 長	清水 二郎
大学院総合理工学研究科長	田中 良平
原子炉工学研究所長	福富 博
理 学 部	◎田中 郁三
工 学 部	内藤 喜之
	○渡辺 隆
大学院総合理工学研究科	武者 利光
留学生委員会委員長	柳沢 健
教 務 部 長	吉見 吉昭
事 務 局 長	鈴木 博司
工 学 部	梅谷 陽二
	森田 矢次郎
	竹中 俊夫
資源化学研究所	大島 栄次
精密工学研究所	森 栄司
工業材料研究所	丸茂 文幸
幹 事	研究協力部長

留学生会館運営委員会

教 務 部 長	吉見 吉昭
留 学 生 委 員 会	柳沢 健
	渡辺 隆
厚 生 補 導 委 員 会	関根 太郎
	桃山 貞登
理 学 部	吉田 弘
工 学 部	森泉 豊栄
大学院総合理工学研究科	桃島 成治
資源化学研究所	広瀬 千秋
留 学 生 相 談 主 事	森田 矢次郎
工 学 部	沼沢 治治
	片山 功蔵
	原 芳男
事 務 局 長	鈴木 博司
幹 事	教務部次長
	教務課長
	厚生課長

総合情報処理センター運営委員会

セ ン タ ー 長	◎池辺 潤
セ ン タ ー 助 教 授	前野 年紀
理 学 部	小野 豊郎
工 学 部	○木村 泉
	菊地 実
	小川 浩平
	和田 章
	長松 昭男
大学院総合理工学研究科	海野 肇
資源化学研究所	仲 勇治
精密工学研究所	今井 聖
工業材料研究所	橋爪 弘雄
原子炉工学研究所	北本 朝史
教 育 委 員 会	小林 宏
研 究 委 員 会	小林孝次郎
附 属 図 書 館 長	市川 惇信
教 務 部 長	吉見 吉昭
事 務 局 長	鈴木 博司
幹 事	センター事務長

総合情報伝達システム運営委員会

理 学 部	綱島 滋
工 学 部	筑野 嘉彦
	岡部 平八郎
	阿部 正紀
大学院総合理工学研究科	加藤 武
原子炉工学研究所	三神 尚
工業材料研究所	中村 哲朗
大学院総合理工学研究科	小川 雅生
原子炉工学研究所	◎新井 栄一
保健管理センター所長	稲田 祐二
事 務 局 長	鈴木 博司
幹 事	研究協力部長

エックス線障害防止専門委員会

理 学 部	高柳 邦夫
工 学 部	島内 浩喬
	加藤 誠軌
	入戸野 修
	脇原 将孝
大学院総合理工学研究科	山崎陽太郎
資源化学研究所	佐伯 雄造
精密工学研究所	鈴木 朝夫
工業材料研究所	森川日出貴
原子炉工学研究所	一守 俊寛
幹 事	研究協力課長

安全管理実施委員会

健康安全委員会委員長	◎福富 博
理 学 部	桑嶋 功
工 学 部	高柳 邦夫
	大門 正機
	山本 經二
	田村 章義
	中瀬 明男
大学院総合理工学研究科	岡田 勲
	池田 光男
資源化学研究所	梶部 征夫
精密工学研究所	林 輝
工業材料研究所	斎藤 安俊
原子炉工学研究所	高木 隆三

理 学 部	河村 一知
工 学 部	八木 克道
	早川 豊彦
	辻井 重男
	末松 安晴
大学院総合理工学研究科	伊賀 健一
	槽谷 紘一
資源化学研究所	石田 愈
精密工学研究所	上田 光宏
工業材料研究所	小池 迪夫
原子炉工学研究所	北沢日出夫
附 属 図 書 館 長	市川 惇信
教育工学開発センター長	森 政弘
総合情報処理センター長	池辺 潤
研究・情報交流センター長	小林 啓美
総合研究館長	小林 啓美
工 学 部	中条利一郎
	松本 浩之
大学院総合理工学研究科	◎岸 源也
教育工学開発センター	清水 康敬
教 務 部 長	吉見 吉昭
事 務 局 長	鈴木 博司
幹 事	庶務部長
	経理部長
	施設部長
	研究協力部長
	教務部次長
	総理工等事務部長

保健管理センター運営委員会

保健管理センター所長	◎稲田 祐二
セ ン タ ー 助 教 授	榎本 稔
	林 仁忠
理 学 部	岡 睦雄
工 学 部	吉川 昌範
	桐生 武夫
大学院総合理工学研究科	土肥 義治
精密工学研究所	下河辺 明
学 生 相 談 室 長	日野 太郎
教 務 部 長	吉見 吉昭
事 務 局 長	鈴木 博司
幹 事	教務部次長
	厚生課長

研究・情報交流センター運営委員会

センター長	◎小林 啓美
理学部	池川 信夫
	小島 政和
工学部	小坂 丈子
	○谷口 雅男
	澤本 正樹
大学院総合理工学研究科	森 勉
	中野 文平
資源化学研究所	田附 重夫
精密工学研究所	奥島 基良
工業材料研究所	今井 久雄
原子炉工学研究所	河村 和孝
総合研究館長	小林 啓美
研究委員会委員長	宗宮 重行
事務局 局長	鈴木 博司
事務局 局長	鈴木 博司
幹事	研究協力部長 総理工等事務部長

総合研究館運営委員会

理学部	池川 信夫
	小島 政和
工学部	小坂 丈子
	谷口 雅男
	澤本 正樹
大学院総合理工学研究科	森 勉
	中野 文平
資源化学研究所	田附 重夫
糧密工学研究所	奥島 基良
工業材料研究所	今井 久雄
原子炉工学研究所	河村 和孝
研究委員会委員長	宗宮 重行
総合研究館長	◎小林 啓美
事務局 局長	鈴木 博司
幹事	総理工等事務部長

極低温エネルギー実験センター運営委員会

センター長	栗野 満
センター助教授	大塚美枝子
理学部 局長	早川宗八郎
理学部	永田 一清
	小尾 欣一
工学部	越後 亮三
	佐藤 則明
大学院総合理工学研究科	関根 松夫
	塩田 進
資源化学研究所	鈴木 寛治
精密工学研究所	若島 健司
理学部	比企 能夫
事務局 局長	鈴木 博司
幹事	理学部事務長

昭和59年度東京工業大学公開講座「生命のいとなみと人間社会」の開講について

日 時 昭和59年9月19日(水)～10月24日(水)の毎週水、金曜日 午後6時～7時30分

場 所 東京工業大学 121講義室

対 象 者 一般市民 200名(先着順)

講 習 料 2,500円

申込期間 8月15日(水)

申 込 先 理学部化学科山中研究室(旧分析棟110号室)

講 師 本学理学部化学科教官

問い合わせ先 理学部化学科山中研究室
電話 726-1111 内線 2225

学生用図書の選択について

例年、図書館では学生諸君の学習・研究・教養に必要と思われる図書を購入していますが、本年も6月25日の附属図書館委員会で、59年度の収書計画が決まりました。次の学生用図書選択委員会委員の方々が、学内利用者の希望を広く取り入れ、各分野毎に図書の選択に当ることになりました。図書を購入希望される方は、図書選択委員に申し込むか、図書館の各階にある投書箱をご利用ください。

なお、お問合せは、和書掛(内線2093)、洋書掛(内線2092)、分館事務掛(内線2108)へご連絡ください。

昭和59年度 学生用図書選択委員会委員

所 属	官 職	氏 名	選 書 分 野
理学部			
数 学	助教授	増田 一男	数 学
情報科学	教 授	梅垣 壽春	情報科学
一般教育(物理)	助教授	吉田 弘	物 理
" (化学)	教 授	森 雄次	化 学
" (生物)	"	平本 幸男	生 物
工学部			
金 属	助教授	入戸野 修	金 属
無機材料	教 授	山根 正之	化学工学
"	"	小坂 丈子	地 学
機械物理	助教授	宮内 敏雄	機 械
経営工学	教 授	秋庭 雅夫	経営・経済
電気・電子工学	助教授	南 一男	電気・電子
建 築	教 授	谷口 汎邦	土木・建築
社会工学	助教授	渡辺 貴介	社会工学
一般教育(人文・社会)	教 授	前原 昭二	人文・社会
" (社会)	講 師	大友 進	"
資源化学研	助教授	軽部 征夫	医学・薬学
原子炉研	"	北本 朝史	化学工学
理学部			
天然物化学	"	矢戸 和夫	
大学院総合理工			
電子工学	"	野中 勉	長津田分館
社会開発工学	"	乾 正雄	
化学環境工学	"	小林 孝彰	
資源化学研	"	森川 豊	
精密工学研	"	上田 光宏	
工業材料研	教 授	沢岡 昭	

第32回 東京地区国公立大学体育大会本学で開催

この大会は、東京地区国公立大学学生の体育活動の発展を促進するとともに、学生相互の親睦を図る目的で、開催されます。大会実施にあたっては、毎年各大学が持ち廻りで当番校を決めて大会を主催し

ていますが、本年度は、本学が正當番校で副當番校には、都立大学が決まりました。5月16日(水)には、本学新食堂2階で、第1回の体育大会実行委員会が開催されて競技細目が決定されました。✓

参加大学と出場種目一覧

競技種目	参加大学名	陸上競技	水泳	硬式野球	軟式野球	硬式庭球	軟式庭球	バスケットボール	バレーボール	サッカー	ラグビー	卓球	バドミントン	柔道	剣道	ハンドボール	空手	ヨット	弓道	ゴルフ	スキー	出場種目数
男子	東大	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	20
	医大			○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	14
	外語大	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	18
	学芸大	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	18
	農工大	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	18
	芸工大				○	○		○		○	○				○		○			○	○	9
	商船大		○	○		○		○	○	○	○	○	○	○	○		○	○			○	13
	水産大		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○		○	16
	電通大	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	20
	一橋大	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	19
女子	都立大	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	19
	東工大	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	20
	出場校数	8	9	11	9	12	10	12	11	11	12	11	11	11	12	9	9	8	10	8	10	204
	東大	○	○			○	○	○	○			○	○		○				○			10
	医大					○	○	○	○			○	○		○				○		○	7
	外語大					○	○	○	○			○	○								○	6
	学芸大	○	○			○	○	○	○			○	○		○				○		○	11
	農工大	○				○	○	○	○			○	○		○				○		○	9
	芸工大					○		○							○						○	4
	商船大																				○	0
女子	水産大		○				○												○			3
	お茶大					○	○	○	○			○	○		○				○		○	9
	電通大						○								○				○			3
	一橋大	○				○	○						○						○			5
	都立大		○			○	○	○				○	○		○				○			8
	東工大											○			○						○	3
	出場校数	4	4	0	0	9	10	7	4	0	0	8	8	0	9	0	0	0	9	0	6	78
	合計	12	13	11	9	21	20	19	15	11	12	19	19	11	21	9	9	8	19	8	16	782

競 技 種 目		会 場
陸 上 競 技	東京学芸大学陸上競技場	
水 上 競 技	東京工業大学プール	
硬 式 野 球	東京工業大学グラウンド、一橋大学硬式野球場	
軟 式 野 球	東京大学駒場球場	
硬 式 庭 球	東京工業大学硬式庭球コート及び当事者コート	
軟 式 庭 球	東京工業大学軟式庭球コート	
バスケットボール	東京工業大学、東京農工大学、東京水産大学各体育館	
バレーボール	東京工業大学体育館、東京水産大学体育館	
サッカーク	東京工業大学、一橋大学、東京農工大学、東京水産大学	
ラグビー	東京工業大学グラウンド	
卓 球	東京工業大学体育館	
バドミントン	東京工業大学、東京農工大学農学部、電気通信大学各体育館	
柔 道	東京学芸大学武道館	
剣 道	東京工業大学体育館	
ハンドボール	東京工業大学ハンドボールコート	
空 手	東京都立大学体育館	
ヨ ッ ト	葉山森戸海岸	
弓 道	東京工業大学弓道場	
ゴ ル フ	グリーンクラブ千歳刈穂ゴルフコース	
ス キー	長野県戸狩スキー場	
女	陸 上 競 技	東京学芸大学陸上競技場
	水 上 競 技	東京工業大学プール
	硬 式 庭 球	東京工業大学硬式庭球コート及び当事者コート
	軟 式 庭 球	東京都立大学軟式庭球コート
子	バスケットボール	東京工業大学体育館、東京学芸大学体育館
	バレーボール	お茶の水女子大学体育館
の	卓 球	東京工業大学体育館
	バドミントン	東京工業大学、東京農工大学農学部、電気通信大学各体育館
部	剣 道	東京工業大学体育館
	弓 道	東京工業大学弓道場
	ス キー	長野県戸狩スキー場

大会期間は、5月初旬から翌年3月末までにわたる長期間となり、競技種目も20種目を数え、試合会場も本学を始め、各参加大学の施設を借用して実施されます。また、ゴルフ、ヨット、スキーは、他県に会場を移して熱戦を繰り広げるといった、大学の大きな年間行事の一つになっています。この記事をご覧の頃には、すでに一部の競技は終了しているものと思われますが、学生諸君の観戦、又は、応援を歓迎します。体育大会に関する問い合わせ、情報等は、教務課学生掛で取り扱っています。なお、第32回大会のポスターは、本学美術部駒沢大君がデザインしたものです。

東京工大クロニクル No.170

昭和59年7月7日

東京工業大学広報委員会 発行◎

東京都目黒区大岡山2-12-1 〒152

電話 03-726-1111 内線 2032